

発信箱

まさしく戦後の「有事タブー」の終えんである。有事法制関連の法案が、約9割という圧倒的多数で、衆院を通過した。

賛成した野党第1党・民主党の「成長」を評価する声がある。本当にそうか。論議すべきことを、省略していなかったか。

不思議な現象がある。「ナシヨナリズム」をめぐる本が、今、売れ筋なのだ。東京の書店は、「心と国家」と題し、コーナーをつくった程だ。

代表は、小熊英二著「〈民主〉と〈愛国〉」(新曜社)だろう。副題「戦後日本のナシヨナリズムと公共性」の通り、戦後日本の思想家の言動を読み解く書である。

分厚く、しかも高価なのに、これまで1万2000部も売れたのだ。ほぼ同時期に、精神科

高橋 豊



「〈民主〉と〈愛国〉」の後

医の香山リカ著「ぶちナシヨナリズム症候群」(中公新書)が刊行され、鋭く若者たちの「愛国」をこ」に迫った。

東大教授・姜尚中氏カサシヤンと作家・森崇博氏による「ナシヨナリズムの克服」(集英社新書)も、刺激的な本だった。在日の立場から「日本」に対する姜氏の鋭い批判と分析が、明快に伝わってくる。

香山さんは、さうして、文芸評論家・福田和也氏との対談集「『愛国』問答」を出版した。

香山さんに尋ねた。なぜナシヨナリズム批判?

「前の『ぶちナシヨ』は、私自身がよく知るサブカルチャーとしてナシヨナリズムをとらえましたが、今や社会の『ど真ん中』の問題。かつてリベラル派と言われた人が、今、沈黙している。愚直でも、私の思いを語りたい」

議論すべきことは、山積している。(学芸部)